「規則」の延長としての「蝶番命題」 - 『哲学探究』と『確実性の問題』の連続性について-

吉川晴子

§0 序

本論文では、後期ウィトゲンシュタインと最晩年のウィトゲンシュタインの思索の連続性・非連続性について取り扱う。これまで、ウィトゲンシュタインの前期思想(『論理哲学論考』に代表される 1920 年以前の思想(註 1))と後期思想(『哲学探究』(註 2)をはじめとする 1930 年半ば以降に執筆された文書群)の連続性と断絶については多くの議論が重ねられてきた。しかし、『探究』以降のウィトゲンシュタインの思索がどのように変化していったのかについては、管見によると、それほど注目を集めてこなかったようである。実際、『確実性』の研究にかんする文献は、『論考』や『探究』に比べればまだまだ少ないように思われる。さらに、ウィトゲンシュタインと懐疑主義との関係を取り扱った文献はときどきみられる(例えば、Prichard(2011))が、『探究』から『確実性』への連続性・非連続性について扱っているものは、部分的ではあるが、山田(2009)だけである(註 3)。

最晩年の思索が書き留められているといわれる『確実性の問題』(註 4)は、一見すると『探究』とは、まったく異なる問題意識のもとで書かれたような印象を受けるからかもしれない。この第一印象は正しいのだろうか。正しくないというのが、筆者の結論である。ウィトゲンシュタインは最晩年まで、それまでのものと連続的な問題と格闘していた、ということを示すのが本稿の狙いである。

本論文では『探究』にみられた議論が、ウィトゲンシュタイン最晩年の著作とされる『確実性』ではどのように扱われているのかについて探究を行いたい。具体的には『探究』に登場する「生活形式(Lebensform)」という概念を媒介として、同書§143-242でなされた規則にかんする議論(言葉が意味を持つための条件についての議論)と『確実性』に現れる蝶番命題(hinge propositions)との関連性について解明していきたい(註 5)。もっと言うと、『探究』において言語ゲームを成立させる前提としての規則について、その形式的な側面が語られていた(規則とは、私たちの思考や行為とは無関係に存在し、私たちによって解釈されるものなのではなく、私たちの実践によって生み出される、といった私たちの言語ゲームの規則がどのような働きをしているのかについて記述されていた)のに対して、『確実性』においては「規則」という概念が「蝶番命題」へと変化を遂げることで、それまで単に「規

則」と呼ばれていたものに内容が与えられたということを示したい。「地球は私の身体が生まれる何年も前から存在している(『確実性』§84)」、「私は月へ行ったことがないことを知っている(『確実性』§101)」といった経験的な内容を持つようになったのだ、ということを示したい。これらの作業を通して、『論考』執筆時からウィトゲンシュタインを悩ましてきた言葉の意味にかんする議論が、『探究』の規則にかんする議論を経て、最晩年における懐疑主義論駁へと昇華されてゆく過程を描き出す。

§1 『哲学探究』§143-242

『探究』において「生活形式」という言葉は、いわゆる「規則にかんする議論」とかなり強い関連性を持っている(註 6)。そのため、「生活形式」という概念そのものの説明に移る前に、「規則にかんする議論」とは一体何なのかということを少しだけ整理しておきたい。当の議論は、慣例的な区分けに従うと、『探究』§143・242 で展開されている。この箇所は S.クリプキによる解釈によって注目を集めたことはよく知られているだろう(註 7)。S.クリプキによると、ウィトゲンシュタインは「懐疑論の新しい形を発明した(註 8)」と言われている。このクリプキ解釈の妥当性についてここで検討するつもりはないが、言葉が意味を持つための条件についてのウィトゲンシュタインの見解を正確に把握するためには、ウィトゲンシュタインがここでどのような問題と格闘していたのかを確認しておく必要がある。

ウィトゲンシュタインは、言葉の意味は対象との対応関係によって成立するのではなく、その「使用」によって成立するということを『探究』において示そうとした(註 9)。彼が槍玉に挙げているのはおそらく『論考』で提示された自らの写像理論である(註 10)。『論考』でウィトゲンシュタインは、言葉は現実世界を写し取ることによって意味を持つと考えていた(註 11)。言葉は現実世界の像であるということだ(註 12)。さらに、言葉を用いて行われる思考も像の一種であるといわれている(註 13)。そして、言葉と対象の対応関係をみんなが同じように知っているから、適格な話者は何の支障もなく意志を伝達できると考えている。しかし、私たちは他者の心の中を覗くことができるわけでもないのに、どうしてみんなが言葉と対象の対応関係を同じように知って、同じように遣っているといえるだろうか。同じようにないるとは、同じ像を心に抱きながらまったく異なる言葉をその像に結び付けている人がいるかもしれないという可能性を私たちはどのようにも

て排除するのだろうか。

写像理論に依拠するとこのような答えのない不必要な問いを立ててしまう。 写像理論そのものが「哲学的病」の温床となっているからだ。ここで言葉の 意味にかんしてウィトゲンシュタインは大きな転換をした。言葉とは別に存 在する何物か(例えば、イデア的な実在)が、言葉に意味を与える(写像理 論(註 14))ではなく、言葉は人々がそれを使用する仕方が一致することに よって意味を持つのだとしたのだ。

もしウィトゲンシュタインが言うように言葉の意味はその使用によって得られるのだとするならば、次のような反論を抱く人々もいるだろう。つまり、言葉の使用が人々の間で一致するということは、人々は何らか一定の規則に従っていると考えられる。けれども、その規則をみんなが同じように解釈するとは限らない。解釈の仕方は幾通りも考えられるからだ。ここでもまた、規則という像の解釈の問題が浮上する。このことについては、『探究』§201で述べられている。以下、§201からの引用である。

これが我々のパラドックスである。つまり、行動の仕方は規則によって 決定されうることはない。というのも行動の仕方はどれも、その規則に 合致させることができるからだ。そして、規則に反するようにすること もできるのだ。だから、ここにおいて一致や不一致というものは存在し ないだろう。

ここに誤解があるということは以下のような単なる事実によって示される。つまり、この推論の連鎖において私たちは次々と解釈を羅列する。まるで新たな解釈を思いつくまでの少しの間だけ、ある解釈は私たちを満足させてくれるかのように。というのも、これによって私たちが示すものは、解釈ではない規則の把握の仕方があるのであり、個々の適用において、所謂「規則に従うこと」とか「それに反すること」が提示されるような規則の把握の仕方があるということである(註 15)。

言葉の意味を使用に求めることによって、使用規則を如何に解釈するのかという問題が浮上してきた。それについてウィトゲンシュタインは、「実践」という言葉でもって応答している。以下、「実践」というキーワードをもとにウィトゲンシュタインが規則を解釈するという問題にどのように答えたかを見てゆく。

「実践」という言葉は、さきほど引用した箇所のすぐ後の節に登場する。

ここでは、議論の流れを考慮して、§201 の最後の段落から§202 全文を引用する。

このことから以下のように言う傾向があるのだ。すなわち、規則に従った行為はすべて解釈である。しかし、規則についての一つの解釈が別のものに置き換えられるときのみ、解釈について語るべきである(註 16)。

こういうわけで「規則に従うこと」は、実践なのである。規則に従っていると〔自分で〕「思うこと」は、規則に従っていることではない。こういうわけで「私的」に規則に従うことは不可能なのだ。そうでなければ、規則に従っていると〔自分で〕思うことと、〔実際に〕規則に従っていることが同じことになってしまう(註 17)。(〔〕内引用者補足)

規則とは、明文化されてどこかに存在しているものなのではない。規則と は別にそれを解釈する指針のようなものが存在すると考えることは、結局写 像理論のように言葉とは別の実在を想定する考えから脱却できていない証拠 である。私たちは、提示された解釈の妥当性について延々と議論を行うよう な事態に陥ることはない。私たちは規則について解釈する必要などないのだ。 というのも、解釈という作業を挟まなくても、規則は、私たちが行為をする まさにその現場において現れているものなのである。私たちは行為をするこ とによって規則を体現しているということだ。これが、規則に従うこととは 「実践」であるということの内実である。そして、ある規則はある言語ゲー ムにおける有意味な語りの条件になる。その規則によって私たちがどの言葉 で何を意味するかということが規定されるからだ。そのため、「2を足せ」と いう言語ゲームにおいて「10に2を足す」という操作を行って「4」という 答えを出すのは、規則に従っていないとみなされナンセンスな語りとなる。 こうして、ある規則に従ってある言語ゲームが開始され、終わってゆく。そ して、その規則はそのゲームの内でなされる語りが有意味であることを保証 する。

上で見てきたように、規則は言語ゲームにおいて私たちが有意味に語るための条件となっていた。しかし、規則は私たちの振る舞いによって形成されるものであり、その意味で恣意的なのである。つまり、私たちは規則を拒絶することもできるのだ(もちろん、規則を拒絶した場合、他者との有意味

な対話が成り立たなくなってしまうわけだが)。けれども、私たちが現に行っているように言葉を使っているということ、つまり、規則に従って言葉を用いることを私たちは拒絶することができない。このことが私たちの言語使用の前提となっており、これを私たちは受け入れざるを得ない。このような所与の前提をウィトゲンシュタインは「生活形式」と呼んだ。

この「生活形式」という言葉は、後期ウィトゲンシュタインにおいて決定的な立ち位置にあるが、ウィトゲンシュタイン自身によってほとんど語られていない。事実、彼はこの言葉を『探究』において3度しか用いていない(註18)。それが以下の3節である。

戦いが行われているときに命令と報告だけで成り立っている言語を想像することはたやすい。質問と「はい」「いいえ」で答えるだけの言語など多数の言語を簡単に想像できる。言語を想像することは生活形式を想像することなのだ(註 19)。

ここにおいて言語ゲームという言葉は、言葉を話すことは活動の一部であること、つまり、生活形式であるということを際立たせようとしている(註 20)。

人間が言うことは、正しいか正しくないかである。彼らは、彼らが使用する言語において一致している。これは意見の一致なのではなくて、 生活形式の一致なのである(註 21)。

§23 と§241 からの引用を読めば明白であろうが、『探究』において「生活形式」は、私たちが言語ゲームを行うにあたって、疑いを差し挟むことなく受け入れている前提として考えられている。「生活形式」は私たちがこのように言葉を用いているという変えようもない事実を言い表しているのに対して、「規則」は、この言語ゲームを支える足場となっている。

ここまで『探究』において、言語ゲームにおける規則がどのように扱われていたのかを概観してきた。それによると、おのおのの言語ゲームにおける規則は私たちが行為をするまさにその場面で生み出される。そして、ある規則はある言語ゲームにおける有意味な語りの条件になるということであった。

そして、私たちが言葉を遣う存在であるということは私たちの「生活形式」に属する事柄であり、受け入れるべき所与であることが説明された。次節では、『探究』で取り上げられた有意味な語りの前提にある「規則」が、『確実性』においては「蝶番命題」という形をとって現れること、そして「蝶番命題」を支えているものが「生活形式」であるということを示す。

§3 蝶番命題(註 22)

『確実性』は、G.E.ムーアの「常識の擁護」と「外界の存在証明」への反応として書かれたことはよく知られているであろう。この議論の過程で蝶番命題(ウィトゲンシュタイン自身はこの用語を用いていない。後の解釈者たちによる命名である。)という、命題のなかでもある特定の役割を果たす命題の存在が提示される。ムーアがどのような議論を行っていたのかということにかんする詳細は、本論文の主旨から外れるため割愛する。しかし、実際のところ、上述のようにムーアの議論をもとにウィトゲンシュタインは、自らの議論を進めているため、『確実性』の読解にあたってムーアの議論を切り離すことは難しい。ここでは、蝶番命題とは何なのか、『確実性』における議論でどのような役割を果たしているのかということについて簡単に触れておく。

『確実性』でウィトゲンシュタインは、私たちの持つ知識を正当化している根拠は結局のところ存在しないと考えるタイプの哲学的懐疑主義に対して、正当化には終わりがあるということを示そうとしている。そして、これ以上疑いえないものとして蝶番命題があるのだ。以下でその内実について触れることとする。

『確実性』において蝶番の比喩が登場するのは§341 においてである。以下、 そこからの引用である。

つまり、私たちが提起する疑問と私たちの疑いは、疑いを免れている 命題がある、という事実に基づいている。いわばそれらを軸にして回る 蝶番のような命題があるのだ(註 23)。

そして、

・・・疑われることのないものが本当に存在するということは、私たちの科学的探究の論理に属しているのだ(註 24)。

ウィトゲンシュタインは、「私はここにいる(『確実性』§10)」、「地球は私の身体が生まれる何年も前から存在している(『確実性』§84)」、「私は月へ行ったことがないことを知っている(『確実性』§101)」などの日常的信念にかんする命題を私たちの懐疑の対象とならないものとして挙げている。それらを無根拠に受け入れるからこそ私たちは言語ゲームを滞りなく遂行できるのだ。つまり、これらの日常的信念にかんする命題、言い換えると蝶番命題は、私たちが何かを探究するための足場になっているのだ。ドアが上手に開け閉めされるために、蝶番が存在しているように、これらの命題も私たちがある言語ゲームの中で探究を進めていくために不可欠なものとして存在している。その言語ゲームが遂行されているあいだは、これらの命題が疑われることはない。もし、それを疑いたいならば私たちは別の言語ゲームを始める必要がある。

この蝶番命題は、愚鈍さや軽信によって盲目的に受け入れられているわけではない(註 25)。というのも、

さて私はこの確実性を軽率さや軽薄さに似たものとしてではなく、生活形式とみなしたい(註 26)。

しかし、これは次のことを意味する。すなわち、私はそれ〔生活形式〕 を正当化や非正当化を超えたところに存在する何かであると考えたいの だ(註 27)。(〔〕内引用者補足)

私たちがある言語ゲームにおいて何らかの蝶番命題を受け入れて探究を行っているということ、これは私たちの「生活形式」なのだとウィトゲンシュタインは言う。蝶番命題は、それが真であればなぜ真であるのか、それが偽であるならばなぜ偽であるのか、といった真偽の根拠を必要とするものではない。ゲームの規則と同じように、それを疑ってしまえばゲームを開始することができなくなってしまうのだ。そういう意味で蝶番命題は、疑いを免れているのであり、私たちが言語ゲームを展開するうえで受け入れるべきものなのである。そして、私たちがこのような確実性をもって言語ゲームを行っているという現実をウィトゲンシュタインは、「生活形式」なのだといった。

かつて受け入れられていた蝶番命題の中には、蝶番として機能しなくなっ

たために除外されたり、逆に新たな蝶番として導入されるものがあるとされている(註 28)。ウィトゲンシュタインは「私は自分が月へ行ったことがないことを知っている」を蝶番命題として例示していたが(註 29)、これが蝶番命題でありえるのは、ウィトゲンシュタインがこの言明を書き留めた時点では、人類の中で誰も月へ行ったことがなかったからこそ、蝶番として機能していたのである。しかし、人間が月へ行ったことがあるということが事実になってしまった今では、この言明は蝶番としての機能を果たせなくなってしまったために、蝶番から除外される(註 30)。このように、蝶番命題は普遍的に確固として存在しているわけではなく、言ってしまえばある意味で恣意的に取り決められているといえる。

第1節で、私たちが盲目的に規則に従って言葉を用いているという事実は、私たちの「生活形式」であるということが確認された。そして、本節では、私たちの疑いを免れているものとして蝶番命題があり、しかもその確実性を受け入れて私たちが生きているという事実もまた私たちの生活形式なのだと述べられた。このことから『探究』における「規則と」『確実性』における「蝶番命題」には関連性があることが読み取れる。両者ともに恣意的で、ある言語ゲームで有意味な語りを行うにあたって受け入れなければならない前提である。次節では、この両者の関連性を掘り下げることにより『確実性』における「蝶番命題」は、『探究』における「規則」の延長にあるということを示す。

§3 規則から蝶番命題へ

前節まで『探究』における「規則」と『確実性』における「蝶番命題」の 関連性について検討を加えてきた。本節では、両者の関連性をさらに追及し てゆく。このことが最も顕著に表れているのは、両者ともに正当化が尽きる ところに存在しているものであるということだ。ウィトゲンシュタインは両 方の議論において次のようなことを言う。それは、正当化が尽されたあとに は「行為」が残るということである。つまり、蝶番命題も規則と同様に私た ちが行為をしているまさにその現場において体現されているということだ。 以下、『探究』と『確実性』からの引用である。

「私はどのようにして規則に従うのだろうか」この問いが 〔規則に従 うことの〕原因にかんする問いでないのならば、私が規則に則ってこの ように行為することへの正当化についての問いである。

正当化が尽きたならば、岩盤に突き当たってしまう。私の鍬は跳ね返されてしまう。そこで私は以下のように言いがちである。「私は単にこのようにするのだ」と(註 31)。([] 内引用者補足)

私が規則に従うとき、私は選択をしない。

私は盲目的に規則に従うのだ(註32)。

ここまでは『探究』からの引用であった。ウィトゲンシュタインは『確実性』においても同じように私たちがある仕方で行為しているということに重きを置いている。

これが意味しているのは次のことではないか。つまり、私は無条件にこの信念に従うのであり、何にも惑わされることがないということだ(註33)。

このことによって私はもちろん、人々がこのように振舞うべきだと言いたいのではない。ただ彼らはこのように振舞っていると言いたいだけなのだ(註 34)。

私たちは規則に盲目的に従う。規則はそれが正しいのか正しくないのかという正当化を超えたところに存在している。これはちょうど、蝶番命題が如何なる正当化をも超えたところにあることと同じである。このことは第 2 節の『確実性』 §359 からの引用でも確認している。

規則が明文化されていなかったのに対して、蝶番命題は「私はここにいる」、「地球は私の身体が生まれる何年も前から存在している」、「私は月へ行ったことがないことを知っている」などのように明文化されているということを指摘する人もいるであろう。しかし、その必要はない。なぜなら、私たちが一定の仕方で行為しているという現実が先にあって、それを言葉にまとめたものが蝶番命題だからだ。このことは、正当化が尽くされたあとには行為が残るという記述からも明らかである。

私たちが規則に従っているからこそ、言語ゲームが成立しているということであった。私たちが参加する言語ゲームにはそれぞれ規則が存在し、私たちは盲目的に規則に従うことでゲームに参加している。『探究』では、このように言語ゲームと規則にかんする形式が語られていた。

これに対して『確実性』においては、『探究』において単に「規則」という言葉だけで言い表されていたものに具体的な形が与えられたと考えることができる。すなわち、私たちは各言語ゲームの蝶番命題(これは何度も出てきているが、「私はここにいる」、「地球は私の身体が生まれる何年も前から存在している」、「私は月へ行ったことがないことを知っている」のような経験的な側面が付与された)に従ってそのゲームにおいて何が探究されるべき課題であって、何がゲームを進めるうえで前提とされなくてはいけないかという規則に従ってゲームを進めているということだ。蝶番命題の例によって、規則にはどのようなものがあるのかということが具体的に示された。例えば、化学の実験をしている際には、実験器具が存在しているということはこの探究を進めるうえで前提として受け入れなくてはならない。

もう一つ例を挙げると、足し算をするとき私たちは、数とは実在なのか、などということを問うたりはしない。自然数列においては、3の次には 4 が来るということを受け入れているのであって、3の次には 4 が来ないかもしれないなどと懐疑的な疑念を抱いたりもしない。つまり、足し算のゲームで私たちは「数とは実在なのか」もしくは「3 次には 4 が来ないかもしれない」ということは問うたりしないという規則に従ってプレイするのだ。これらの疑念は、単に「足し算をする」という言語ゲームにおいて不必要であるからだ。

さらに、規則と蝶番命題は両者ともに恣意的なものである。このことは前節までですでに指摘されている。私たちが言葉を使っているという事実は、私たちの「活動の一部」であって生活形式に属することであるのだが、個々の言葉の使用の現場における使用規則自体は私たちの行為において決定される。そのために恣意的であるといわれえる。そして蝶番命題についても、ある命題が蝶番命題として機能できるかどうかということは時代・文化・言語ゲームに参加する個人などの要因によって可変的であるということであった。このことからも、両者の関連性を読み取ることができる。

このように、『探究』において「規則」という言葉で語られていたものが、 『確実性』においては「蝶番命題」という形をとって、具体的に個々の言語 ゲームでの探究の方向性を決定する役割を果たしていることがわかる。

§4 結

私たちはここまで、『探究』で明示的に語られた「規則」の概念が、どのよ うに『確実性』へと受け継がれていったかを見てきた。その中で両者には以 下の3つの特徴が共通しているということが指摘された。第一に、規則も蝶 番命題も私たちがある言語ゲームを展開するうえで受け入れなくてはいけな いものであり、私たちが言語ゲーム内で行う活動の足場を形成しているとい うこと。第二に、規則と蝶番命題は両者ともに恣意的なものであり、ゲーム 可変的であること。最後に、規則も蝶番命題も正当化が尽くされたところに 存在しており、私たちが行為をするということに体現されているということ。 以上の三点である。けれども、蝶番命題は以下の点において規則の発展形で あるといえる。つまり、『探究』において単に言語ゲームの「規則」という言 葉で言い表されていたものには、「私はここにいる」、「地球は私の身体が生ま れる何年も前から存在している」、「私は月へ行ったことがないことを知って いる」のような具体性を帯びた命題が含まれており、個々のゲームごとに異 なる規則が存在しており私たちはそれに従ってゲームを行っているというこ とが明確に打ち出された。以上のことから『確実性』における「蝶番命題」 は『探究』』における「規則」が発展した形であるということが示された。

なお、本論文においては、経験的内容を持つ蝶番命題がなぜ、本来ならば 真偽が問われることのない、言語ゲームの「規則」として機能することがで きるのか、ということについて詳しく検討することができなかった。これに ついては、『確実性』§15、§166、§205、§309、§319 などを根拠に経験命題 の様相を帯びているにもかかわらず、その真偽が問われることのないものこ そが蝶番命題である、ということを示すことができる、と筆者は考えている。 しかし、紙幅の関係で本稿では、それにかんして『確実性』を引用しつつ論 証することができなかった。そのため、このことにかんしては場を改めて取 り組みたいと考えている。

註釈

- (註1)以下『論考』とする。
- (註 2) 以下『探究』とする。
- (註3) 山田 (2009)、91-102 頁を参照せよ。
- (註4)以下『確実性』とする。
- (註 5) 両者の関連性についてはすでに山田(2009) においてなされていたが、主題ではなかったため軽く触れられるのみであった。それを本論では

主題として追求したい。

- (註 6) 規則にかんする議論を行う上で「生活形式」という概念は不可欠のものとなっているといえるかもしれない。Kripke(1982)、McGinn(1984)などを参照せよ。
 - (註 7) Kripke (1982)
 - (註 8) Kripki(1982) 117
 - (註 9) 『探究』 §43
- (註 10)『探究』全体でウィトゲンシュタインが、『論考』を念頭に置いていたのは『探究』の序文からも明らかである。そこで彼は次のように書いている。「私は昔の考えと新しい考えを一緒に合わせて出版すべきだろう。今の考えは、昔のおかしな考え方と比較することによって正しく理解されうるだろうから。」(『探究』序文)
 - (註 11)『論考』2.1-2.225を参照せよ。
 - (註 12) Ibid.
 - (註 13)『論考』3-3.05を参照せよ。
- (註 14) このような言葉以外の実在によって言葉の意味が与えられるという考え方はウィトゲンシュタインの写像理論に限らず、古くから存在していた。
 - (註 15) 『探究』 §201
 - (註 16) 『探究』 §201
 - (註 17) 『探究』 §202
- (註 18)本論文で『探究』というとき、基本的に『探究』第一部と呼ばれていた部分を指している。すなわち、§1-693までのことである。
 - (註 19) 『探究』 §19
 - (註 20) 『探究』 §23
 - (註 21) 『探究』 §241
- (註 22)『確実性』における蝶番命題にかんしては、平田 (2016) で詳細に考察が行われている。そちらを適宜参照した。
 - (註 23)『確実性』§341
 - (註 24)『確実性』 §342
 - (註 25)『確実性』 §235
 - (註 26)『確実性』§358
 - (註 27)『確実性』 §359
 - (註 28) 『確実性』 § 97、99 の川床の比喩によって語られている。
 - (註 29)『確実性』§111

(註 30) モイヤル-シャーロックは、ウィトゲンシュタインの記述をもとに蝶番命題をそれらの特徴によって四つのグループに分類した。(Moyal-Sharrock 2007) 彼女は同時に、何が蝶番命題として機能するかということは、時代・文化・言語ゲームに参加する個人によって変化するということを指摘していた。

- (註 31) 『探究』 §217
- (註 32) 『探究』 §219
- (註 33)『確実性』 §251
- (註 34) 『確実性』 §284
- (註 35) 『探究』 §23

引用・参考文献

- 平田仁胤、2016、「ウィトゲンシュタインの『確実性の問題』における蝶番命題に関する予備的考察」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第 162 号 (2016)、11-17 頁。
- 中村昇、2003、『いかにしてわたしは哲学にのめりこんだのか』春秋社。
- 山田圭一、2009、『ウィトゲンシュタイン最後の思考:確実性と偶然性の邂逅』勁草書房。
- ----、2005、「間違いの可能性と懐疑論:最晩年のウィトゲンシュタインの知識をめぐる考察」『第 54 回〔東北哲学会〕大会研究発表論文』15-29頁。
- Prichard, Duncan, Wittgenstein on Skepticism, in Marie McGinn & Oskari Kuusela (eds.), The Oxford Handbook of Wittgenstein. Oxford University Press (2011)
- McGinn, Colin, Wittgenstein on Meaning (Basil Blackwell), Oxford, 1984 (コリン・マッギン『ウィトゲンシュタインの言語論: クリプキに抗して 』 植木哲也, 塚原典央, 野矢茂樹訳、東京、勁草書房、1990)
- Moyal-Sharrock, D., 2007, *Understanding Wittgenstein's On Certainty*, London: Palgrave Macmillan
- Wittgenstein, L., 1972, Anscombe, G. E. M. and von Wright, G. H. eds., On Certainty, New York: Harper Torchbooks.
- Ludwig Wittgenstein, C. K. Ogden, tr., *Tractatus-Logico Philosophicus* (Routledge), New York 2005⁹ (L.ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』、野矢茂樹訳、岩波書店、2017)
- Ludwig Wittgenstein, G. E. M. Anscombe, tr., Philosophical

哲学の門:大学院生研究論集

Investigations (Wiley-Blackwell), Oxford, 1953, 1974